



第二八回 書学書道史学会大会を終えて

鈴木 晴彦

第二八回書学書道史学会大会が、去る平成二九年一月二五日(土)・二六(日)の両日にわたり、日本大学文理学部三号館において開催されました。準備不足の多々あるなか、両日の参加者は延べ一八名を数え、無事に閉会式を迎えることができました。大会開催校といたしまして、ご参集をいただきました会員の皆様へは、心より御礼を申し上げます。

さて、今大会をふり返ってみますと、まずは両日ともに晴天に恵まれたことが、何よりありがたいことでした。また、予定されたプログラムも、すべて滞りなく実施され、開催校の役目を果たせたことに安堵しております。実

●書学書道史学会

会報

第34号

平成30年(2018)1月15日
編集・発行
書学書道史学会
会報委員
〒100-0003
東京都千代田区一ツ橋1-1-1
パレスサイドビル9F
(株)毎日学術フォーラム内
TEL : (03)6267-4550
FAX : (03)6267-4555
メールアドレス:
maf-syogaku@mynavi.jp

施された内容に目を向けてみますと、今大会では八本の研究発表があり、例年どおりの活発な質疑と応答が行われました。記念講演会にあつては、本学元教授の辻勝美先生が「兼好と書の道」と題する講演をされ、たいへん好評を博しました。講演会後の懇親会にあつても、多くの参加者を集め、学内食堂さくらホールにて盛り上がりを見せました。

一方、例年と大きく異なる点は、閉会式が一二時過ぎに行われ、その後、大会鑑賞会として会員各位が都内で開催の出光美術館、および書道博物館での鑑賞に赴く日程となったことです。もともと大会に付随の鑑賞会は、これまで各開催校で趣向をこらした展示が提供され、大会参加の会員を大いに楽しませてきました。今大会では、幸いにも本学の学内施設である資料館で「王朝の物語展」を開催していたことから、これを学内鑑賞会とさせていただきます。とはいえ、大会開催校にとつて学内鑑賞会は、悩ましい企画であり、かなり負担となることをぬぐいきれませんでした。その意味で条件さえそろえば、今大会で実施した学外施設での鑑賞会も、今後は大いに企画してよいのではないかと感じました。

ところで、本学での大会開催は、八年前の平成二二年につづき、二度目の大役をお引き受けしたことになります。前回は学会創設二〇周年であつたことから、式典として学会草創期から本学会をリードされてこられた先生方へ感謝状の贈呈が行われました。贈呈式の後、西林昭一元理事長と興膳宏元理事長の両先生による講演会が催され、参加者が熱心に耳を傾けておりました。この時、参加者一九〇名、発表件数一四本を数え、二〇周年にふさわしい大会であつたことを鮮明に覚えております。まもなく本学会は、創設三〇周年を迎えようとしております。創設三〇周年が新たな幕開けとなり、書学書道史という分野をさらに切り開いて進む学会にならんとを期待しております。

(会場校責任者)

都内、美術館博物館鑑賞会報告

都内、美術館博物館鑑賞会について

去る11月25・26日の大会に於いて、日本大学文理学部資料館で特別観覧が、26日には台東区立書道博物館・出光美術館で鑑賞会が企画された。26日の参加者数が各館ともに少なかつたのは残念であったが、学会大会の企画として一つの方法を模索できたようにも思う。3館の展示や観覧の様子をそれぞれ記し報告に変えたい。

●日本大学文理学部資料館

「王朝の物語展」鑑賞会

日本大学文理学部資料館では、中古文学会五十周年記念企画の一環で「王朝の物語展」が開催された。本学会大会に合わせて、両日共に平日時間で特別開館された。展示は『竹取物語』・『伊勢物語』・『大和物語』・『うつほ物語』・『落窪物語』、いわゆる『源氏物語』以前の王朝の物語（平安時代前期の物語）を特集して展示会が催された。文理学部図書館に所蔵される資料の他、日本大学図書館、個人蔵の貴重なコレクションも展示され、鎌倉時代から江戸時代に至る写本や版本を中心として、絵巻やかかるたなど様々な資料が並んでいた。



とりわけ、全十巻の「落窪物語絵巻」は圧巻で、豪華な絵に朝倉重賢の筆で詞書が記される。その他、冷泉為相や近衛政家を伝称筆者とする『伊勢物語』の写本や古筆切、連歌師・里村玄陳筆の『大和物語』など、書分野にも関連する資料も散見された。中古文学の展示であったが、関連諸学ということで大勢の学会会員の方々にも足を運んでいただけたのは嬉しいかぎりである。

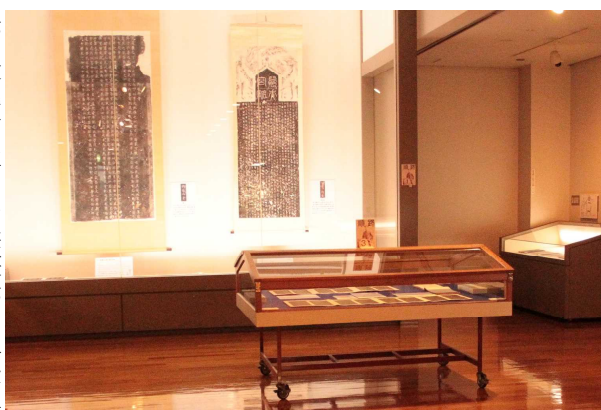
同館は、来年度の春先に『源氏物語』を特集した展示を企画しているとのこと。また足を運んでいただければ幸甚である。

●台東区立書道博物館

「あの人、こんな字！―歴史上の人物たち― 中国編」鑑賞会

鑑賞会当日、書道博物館では中国史に名を残した人たちの文字の姿を紹介する企画展を開催していた。小説やマンガでも人気のある三国志のスター諸葛亮、唐を代表する詩人の李白や杜牧、書道界の最高峰である王羲之など、歴史や文学好きであれば知っているであろうと思われる人物を取り上げ、その人たちはこんな字だった！という、至極単純なコンセプトであった。書を専門とする学会会員にはおそらく内容が物足りず、それゆえ足が遠のいたのだと思うが、一般の人々にはこれがわりとウケて、中学生や高校生、あるいは初めて来館する人が多かった展覧会であった。

中国編では、時代順の人物紹介とは別に、二つの特別コーナーを設けた。一つは歴代皇帝、もう一つは三国志である。歴代の皇帝には、仏教を深く信仰した梁武帝、王羲之のマニアの唐太宗、中国史上唯一の女帝であった則天武后、虚弱体質で妻の則天武后に圧倒されつばなしの高宗、楊貴妃にうつつを抜かした玄宗、政治には疎いが書画の才に優れた徽宗、史上最大の文物コレクター乾隆帝など、人間味あふれる天子たちが存在した。初心者にはこうしたエピソードを交えながら皇帝の書をそれぞれ見比べてもらうという鑑賞方法を取り入れ、書を楽しく、身近に感じてもらえるような展示を目指した。



伝の末尾十八行と、華嚴伝の冒頭七行を存し、文字は小粒ながらも鋒先の効いた隸書の趣があるもので、やはり五世紀頃の写本と思われる。巻末には王樹枏の跋文が添えられている。第十二の残巻とともに王樹枏の旧蔵品であり、『三國志』の写本としては世界最古級を誇る。書の楽しさのみならず、奥深さも追求できたという思いを込めたコーナーであった。

二〇一八年は、3月4日まで東京国立博物館との連携企画「呉昌碩とその時代―苦鉄没後90年―」を開催している。両館で呉昌碩ワールドを堪能していただければ幸いである。

●出光美術館

「書の流儀Ⅱ」鑑賞会

出光美術館において、「書の流儀Ⅱ―美の継承と創意」が開催された。内容は、「伝わる、伝える―伝統美の継承と多彩な個性」「王朝の壮麗美―か

三國志コーナーの見どころは、重要文化財に指定されている「三國志呉志」の残巻二巻である。第十二残巻は虞翻伝の残闕十行分であり、一行十三字前後で隸意を含んだ書風から、北朝五世紀頃の写本と考えられる。実はこれに一行の欠落もなく接続するのが、朝日新聞社の創業者の一人、上野理一が収集したコレクションにある「三國志呉志第十二残巻」である。二〇一一年に京都国立博物館で開催された「筆墨精神」の展覧会では奇跡の再会を果たし、両巻を並べて展示することがあったが、書道博物館でもいつか実現させたいと思っている。第二十残巻は、韋曜

な書の旋律」、「正統なる逸格―没後400年・後陽成天皇の周辺」、「画賛―漂泊者たちの遊芸」の四本の柱が立てられ、高等学校芸術科「書道Ⅰ」の教科書に準拠する観点で選ばれた作品が展開される。

第1室では、書聖・王羲之をはじめとする中国書の受容について、コレクションを介して作品の作り方や造形、線質などにぼんやりと中国風を取り入れている様子が垣間見えた。第2室では、「高野切古今集」や「寸松庵色紙」・「継色紙」などの古筆切を中心に、かなの線の美しさが説かれるが、とりわけ「石山切」の貫之集下と伊勢集の対比では線質の違いがわかるような工夫がなされていた。第3室は第2室の流れを受けつつ、伏見天皇や後柏原天皇の晴と襲の書き分けについて比較がなされ、後陽成天皇周辺の寛永の三筆らの書に展開する。本コーナーでは、本阿弥光悦の工房の様子が表面化する。最後は漂泊者の書ということ、松尾芭蕉や仙厓の画賛が展示され、能書（書家）の書にはない魅力が紹介された。単純に名品が並ぶだけではなく、観賞者に何かを考えさせる展示となっており、来場した会員も相互に意見交換をしながら名品を鑑賞していた様子が伺えた。

同館では本年6月に、元永元年（一一一八）におこったとされる人麿影供を記念した企画展、「人麿影供900年 歌仙と古筆」が開催される予定である。



講演会報告

辻勝美氏講演「兼好と書の道」『徒然草』と世尊寺家の人々を中心に「要旨」

●本講演の目的

本講演の目的は、『徒然草』の「書」に関する章段を取り上げ、兼好の「書の道」に関する考えや姿勢を確認することである。

●『徒然草』と書の道―「手習」「能書」「文」など、書についての関心

序段の「硯にむかひて」という表現は、『源氏物語』の手習巻を踏まえた記述である。その手習いとは、自分でも気が付かなかった思いや、心の在り様を、書くことによつて明確に自覚する行為である。兼好は手習いが、鬱屈した自分の気持ちを解放していく唯一の方法であるという在り方を承知した上で『徒然草』を執筆していると考えて良い。

第一六〇段と第二三七段には、世尊寺家の人物が登場する。これまで、世尊寺家の発言が兼好に影響を与えているのではないかという説や、兼好は書を世尊寺経尹に習ったのではないかという説が提示されている。

もし、兼好が書を世尊寺家から習ったとすれば、いつ、どのような接点をもったのか考えるべきである。資料が限られており、この問題の考察を行うことは困難だが、さしあたって第二三八段は欠かせない章段である。この段には、兼好の七つの自慢話がある。そのうちの三箇条目に、世尊寺家の能書、行房が登場する。四箇条目は、比叡山の竜華院の古い額の筆跡は佐理か行成かという議論の時に兼好が、行成なら裏書きがあり、佐理ならば裏書きはないと述べた。これと同じ記述が『入木口伝抄』の中にもあられるということ、このことは兼好が世尊寺経尹から直接手に入れた知識ではないかということが指摘されている。(落合博志『入木口伝抄』について―国文学資料としての考察『法政大学教養部紀要』七八、一九九一年二月)

●兼好と世尊寺家の人々

第二三八段の自讃譚に登場する行房は、文永九年(一二二七)に関東へ下向し、その際『徒然草』にも登場する安達安盛に

口伝を授けていることから、関東とつながりを持つ世尊寺家があつたことがうかがえる。

小川剛生氏の兼好の伝記研究によると、兼好の父は金沢北条氏に仕えていた人物であること、父の没後に母とともに帰京し、嘉元三年(一二三〇)前後には称名寺で活動、延慶元年(一二三〇)には六波羅探題の金沢貞顕への手紙を託されて上洛していることが指摘されている。また兼好は、金沢北条氏である金沢貞顕に右筆的存在として仕え、貞顕の文化的活動のサポート役として積極的に行動をしていたことも指摘されている。(小川剛生『徒然草と金沢北条氏』『中世の随筆』二〇一四年八月／同氏「卜部兼好の実像―金沢文庫古文書の再検討」『明月記研究』十四、二〇一六年一月)

世尊寺家と兼好との関わりに限定すると、兼好はかなり早い時点から金沢貞顕の被官で、出家前から、貞顕周辺の世尊寺家の人々と交流があつたと考えられる。その後の兼好像が、『徒然草』を書く兼好へどう流れていくかということや、「書の道」に関してどのように歩んだかということを考えていく必要がある。

●兼好の書風

兼好の書風は、「本朝古今名公古筆書流」では、世尊寺流と位置づけられている。世尊寺流に分類されるべきであるのかどうか、現存する兼好の筆跡と比較し、再考する必要がある。『徒然草』と同時代の書学書論書には、「道」に関する話が出てくる。兼好も「道」に関して、いろいろ論じている。このような「修行論」と、兼好の発言はどのように重なりあい、どのように異なるのかということを、芸道論の観点から考えていく必要がある。

(日本大学文理学部助手 高橋優美穂)



平成28年度 会計決算報告書		
	項 目	決 算 額
収入部	個人会員会費	2,560,000
	団体賛助会費	600,000
	大会参加費	306,000
	大会懇親会費	225,000
	その他の収入	26,710
	本年度収入計	3,717,710
	前年度繰越金	9,508,795
	収入合計	13,226,505
支出部	編集局経費	446,796
	「学会展望」準備費	105,000
	国際局経費	0
	国内局経費	0
	大会運営費	200,000
	大会準備費	0
	大会懇親会費	200,000
	学術局経費	0
	研究局経費	0
	会報編集委経費	0
	ホームページ委経費	272,700
	事務局経費	
	会議費	5,632
	荷造送料	487,680
	遠隔地役員交通費	0
	選管費	0
	名簿発行費	0
	通信費	3,650
	事務消耗品備品費	0
	事務委託費	725,000
	人件費	100,000
	東洋学・アジア研究連絡協議会	2,000
	予備費	
	本年度支出計	2,548,458
	次年度繰越金	10,678,047
	合計	13,226,505

平成29年度 会計予算報告書		
	項 目	予 算 額
収入部	個人会員会費	2,800,000
	団体賛助会費	550,000
	大会参加費	350,000
	大会懇親会費	160,000
	その他の収入	30,000
	本年度収入計	3,890,000
	前年度繰越金	10,678,047
	収入合計	14,568,047
支出部	編集局経費	700,000
	「学会展望」準備費	100,000
	国際局経費	300,000
	国内局経費	300,000
	大会運営費	200,000
	大会準備費	100,000
	大会懇親会費	160,000
	学術局経費	100,000
	研究局経費	900,000
	会報編集委経費	30,000
	ホームページ委経費	300,000
	事務局経費	
	会議費	30,000
	荷造送料	500,000
	遠隔地役員交通費	400,000
	選管費	50,000
	名簿発行費	200,000
	通信費	8,000
	事務消耗品備品費	10,000
	事務委託費	700,000
	人件費	100,000
	東洋学・アジア研究連絡協議会	2,000
	予備費	9,378,047
	本年度支出計	14,568,047
	次年度繰越金	0
	合計	14,568,047

▽事務連絡(高城弘一事務局長)

▽大会日程等説明

(連絡)

▽会報委員会報告(小川博章会報委員長)

▽事務局報告(高城弘一事務局長)

▽研究局報告(河内利治研究局長)

▽国内局報告(笠嶋忠幸国内局長)

▽国際局報告(弓野隆之副国際局長)

▽学術局報告(森岡隆学術局長)

▽編集局報告(中村伸夫編集局長)

(報告)

(高城弘一事務局長)

▽平成29年度予算・事業活動案

▽平成28年度決算案監査報告(杉浦妙子監事)

(高城弘一事務局長)

▽平成28年度決算・事業活動報告案

(議事)

事については、いずれも満場一致で可決された。

本年度の第28回大会は、平成29年11月25日・26日の両日、日本大学文理学部キャンパス・3号館3505教室において開催された。初日冒頭、例年通り本年度総会が開催された。総会は、高橋利郎理事の司会で、笠嶋忠幸国内局長の開会の辞ではじまった。日本大学文理学部・鈴木晴彦教授による開催校代表挨拶、澤田雅弘理事長の挨拶に続き、萩信雄諮問委員を議長に選出して議事に入り、以下の議事及び報告がなされた。なお、議

(鈴木晴彦理事・会場校責任者)

各局活動報告

国内局

第28回大会は、日本大学(文理学部)において去る11月25日、26日の両日、無事開催となりました。会場のご提供ならびにご支援を賜りました鈴木晴彦先生はじめ日本大学の皆様には厚く御礼申し上げます。またご発表いただきました会員各位、ならびにご出席の皆様のご協力、誠にありがとうございました。なお来年度、第29回大会は10月27、28日の日程で岐阜女子大学での開催となる運びです。

(国内局長 笠嶋忠幸)

国際局

本年度は、内外における書画・典籍・金石資料に関する特別展・常設展に関する展覧会情報のご紹介が遅れておりますが、近く各施設がウェブ上で提供する情報にアクセスできるご案内をアップできる予定です。また、外国から講演等で来日する方があれば、広報等をはじめとするご支援をさせていただきたく存じますので、お知らせください。今後とも、海外での最新情報をお伝えすべく各種の情報を発信したいと思います。

(国際局長 富田 淳)

学術局

J-STAGE

昨春の会報で『書学書道史研究』刊行後、その年度内にJ-STAGEジェイ・ステージ』掲載を心がける旨記しましたが、学会誌27号の刊行が例年より遅くなりましたので、掲載も次年度になりますことを前もってご了承ください。公開日が決まりましたら、学会ホームページでお知らせいたします。

なお、前号26号も昨年4月の公開でしたので、本会報記載の平成28年度決算にはその経費が計上されず、29年度の支出となります。

データベース学会名鑑

日本学術会議・日本学術協力財団・科学技術振興機構連携のWEB学会名鑑(左記URL)について毎秋実態調査がなされ、昨年11月に調査項目に回答いたしました。お気づきのことがございましたら、お知らせください。

ら、お知らせください。
<https://gakai.jst.go.jp/gakai/>

(学術局長 森岡 隆)

研究局

「平成29年度研究促進助成金制度」申請に係る説明会を、5月20日(土)午後2時から4時まで、筑波大学東京キャンパス(一一九教室)で開催致しましたところ、40名ほどの会員の参加がありました。プログラムは下記の通りです。

挨拶(理事長 澤田雅弘)

「研究促進助成金制度」概要について

(副理事長・研究局長 河内利治)

*外部資金に関する現状と本学会の研究促進について

(常任理事・副編集局長 菅野智明)

*「研究助成金 研究計画書」の記載方法について

(理事・副研究局長 永由徳夫)

*ミニ講演「郭派の刀法―呉讓之の奏刀法を中心として―」

(研究局幹事 権田瞬一)

司会(研究局幹事 角田健一)

当日参加できなかった会員のために、このプログラム内容を学会ホームページに期間限定で動画配信致しました(*印のみ)。この説明会が一翼を担ったと思われますが、6月1日から6月7日までの申請期間に6件の申請がありました。

そこで、「書学書道史学会研究促進助成金制度審査規程」第3条(審査の方法)「交付申請のあった会員の研究計画書を研究局長が委嘱する複数の審査員各人が、研究促進助成金制度に照らして10点満点で評点し、平均6点以上を対象に、当該年度の所定件数内で上位から順に採択し、採否に関わる同順位者については、審査員で協議し順位を決するものとする」に則り、審査員を研究局長が委嘱して覆面審査を行いました。

「研究促進助成金制度平成29年度募集要項」3.採用件数には「3件以内」とありますが、審査の結果、第3位が同点で2件あったため、常任理事会(8月11日)ならびに理事会(11月25日)にて協議

した結果、2件とも採択することを承認し、最終的に3件の4件が採択されました。研究代表者名と研究課題名は下記の通りです。

蘇 浩・明治大正期の日本書家と中国・台湾の書法界

——山本竟山と長尾雨山を中心に——

林 司洋・鄧系篆書を受容と展開

——嘉慶期から同治期までを中心に——

関 俊史・中国古代における「書」思想史の定立

——盛唐期から唐宋の変革を視野に——

——盛唐期から唐宋の変革を視野に——

研究局は、如上のように、本年度(平成29年度)より生まれ変わった「研究促進助成金制度」を広く会員に知って頂くための施策として説明会を開催し、お蔭さまで申請者が増え、交付申請者も予定採用件数を超えて採択することができました。これは現在心とえに学会の財政基盤が安定していることが背景にあります。年齢制限を設けていませんで、次年度は本年度同様、多くの会員が「研究促進助成金制度」に申請して、学会全体の研究が発展向上することを祈念しております。

(研究局長 河内利治)

編集局

編集局では、局長の中村伸夫と、副局長の菅野智明、高橋利郎の両氏が中心となり、主たる任務である学会誌『書学書道史研究』第27号の編集作業に当たりましたが、諸般の事情により例年よりも刊行が大幅に遅れました。まずはこのことについて会員諸氏に深くお詫び申し上げます。斯界の研究動向に関する記事についても、事情により今回は休載としました。すでに会員諸氏から提案をいただいていた論文(このキーワード表示、その他、編集局内の各種改善案については継続検討中です。改善案については、編集局内での検討結果をふまえ、できるだけ次回以降の編集に反映させることにします。尚、次号に論文を投稿される方は、平成30年3月31日までに規定に則った提出物を学会事務局宛にお願いします。

(編集局長 中村伸夫)

事務局

【平成28年度事業・活動報告】

5月15日 第31号《会報》発行及び発送
6月30日 第27回大会発表申込締切
7月10日 第14期第1回常任理事会（於 大東文化館）
8月30日 《大会最終案内》《大会レジュメ集》発行及び発送
9月25日 平成27年度決算会計監査
10月1日 第60回定例理事会（於 滋賀大学）
10月2日 第27回大会1日目（於 滋賀大学）
11月1日 第26号《書学書道史研究》発行及び発送
12月31日 第27号《書学書道史研究》投稿申請申込締切
1月15日 第32号《会報》発行及び発送
3月31日 第27号《書学書道史研究》投稿原稿締切

【平成29年度 事業・活動計画】

5月15日 第33号《会報》発行及び発送
7月31日 第28回大会発表申込締切
8月11日 第14期第3回常任理事会（於 大東文化館）
10月15日 《大会最終案内》《大会レジュメ集》発行及び発送
10月下旬 平成28年度決算会計監査
11月25日 第61回定例理事会（於 日本大学文学部）
11月26日 第28回大会1日目（於 日本大学文学部）
11月上旬 第28回大会2日目（於 日本大学文学部）
11月上旬 第27号《書学書道史研究》発行及び発送
12月中旬 会員名簿発行及び発送
12月31日 第28号《書学書道史研究》投稿申請申込締切
1月15日 第34号《会報》・会員名簿発行及び発送
第15期役員選挙告示・投票用紙等発行及び送付
※会報・会員名簿・役員選挙関連同梱
2月21日 第15期役員選挙投票締切
2月25日 第15期役員選挙開票（於 大東文化館）
3月11日 選挙選出理事による緊急会議（於 大東文化館）
3月21日 第62回（臨時）理事会（於 大東文化館）
3月31日 第28号《書学書道史研究》投稿原稿締切

【第15期役員選出選挙について】

本学会の現第14期役員会（理事・監事）は、平成30年3月31日をもって任期（2年）満了となることから、新たに第15期役員選出のために選挙を実施します。会員各位におかれましては、本学会創設以来、守り続けている民主的運営の美風を堅持するためにも、すべての会員による投票をお願いします。

なお、選挙管理委員会については、第14期役員会発足時、すでに理事会で承認された、以下の委員会メンバーによって構成、および実施されることが決定しています。

（選挙管理委員会）

委員長 杉浦妙子

委員 柿木原くみ、高城弘一、永由徳夫

委員 亀澤孝幸、野中直之（以上、理事・監事枠より4名）

委員 亀澤孝幸、野中直之（以上、会員枠より2名）

（選挙名簿と「会員名簿」について）

第15期役員選出選挙にあたり、「選挙名簿」を作成します。本名簿に登録される方は、平成30年4月1日現在、満68歳未満の会員です（「選挙管理規程」第3条による）。ただし、当選後の資格審査の関係上、平成27年度より会費滞納（住所不明含む）の方は、上記年齢に達していない場合であっても、本名簿には登録されていません。

なお、前期には「会員名簿」が発行されませんでしたが、今期は個人情報保護を十分配慮した上で、発行する運びとなりました。こちらが「選挙名簿」を兼ねます。（ご了承ください）

【平成30年度・第29回書学書道史学会大会会場（予定）のお知らせ】

毎年、書学書道史学会大会は、東日本（関東）と西日本（関西以外）、会場を交互に移して、実施してきました。平成29年度は、日本大学文学部（東日本・関東）での開催により、平成30年度は、西日本（関東以外）において開催します。大会終了後のメールによる理事会等の推薦と承認があり、岐阜女子大学を会場校として、10月下旬を開催日として予定しています。（承知おき下さいますようお願いいたします）

【学生会員から一般会員への手続について】

本学会では、学生会員の「有期会員制」を導入しています。この制度は、学生会員（学生会費適用の方）が大学院を修了、もしくは満期退学・自主退学、その他の理由により学籍を失った（学割証の発給対象でなくなった）時点で、学生会員資格を、一旦終了とするものです。該当の方が引き続き本学会会員に留まろうとする場合、以下の会員変更手続きが必要となります。会員変更手続きの用紙が、学会ホームページにアップしてあります。ホームページ右の「入会申込書」を選択し、「会員変更申込書」をダウンロードして、必要事項を記入の上、学会事務局へ送付して下さい。また、当該会員手続きは、届け出制度となっているため、理事会での資格審査はありません。したがって、書類提出のみで学生会員資格の終了時点から自動的に一般会員資格が付与されます。今春に学生会員資格を失う方は、早めに手続きをお願いします。送付先は左記のとおりです。

（事務局の連絡先）

書学書道史学会事務局

〒100-0003

東京都千代田区一ツ橋1-1-1

パスサイドビル9F（株）毎日学術フォーラム内

TEL 03-6267-4550

FAX 03-6267-4555

Eメール nat@sgak@nriyari.jp

※書学書道史学会事務局担当 毛塚

（事務局長 高城弘一）

新入会員紹介 事務局同

（一般会員）

蔵多 敏夫

牧野 浩二

芹澤 麻美子

（学生会員）

張 国龍

京都橘大学大学院

※平成29年4月～同年11月上旬に申請された方

談話室

アナザースカイ

劍持 翔伍

唐代、特に盛唐期に興味を持つてから五十年あまりになります。そのきっかけは、教科書で玄宗皇帝「石台孝経」の文字を見たことでした。その書はあまり高く評価されていないことを知り、調べてみたいと思ったことを記憶しています。

一昨年、陝西省西安市の「西安碑林博物館」を訪れる機会を得ました。著名な観光地ですが、私にとってはことさらに聖地のような場所です。入口にはあの「石台孝経」が佇んでいました。その巨碑を見上げたとき、「石台孝経」がなぜ、あのような書法で書かれたのか分かったような気がしました。この経験を経て、現物の持つ空気を知ること・感じることの重要性を再認識しました。これからも机上の学習だけではなく、五感を使って色々なものを感じ取り、書に向き合つてゆきたいです。

追悼 佐野光一先生

野村 ひかり

平成29年10月18日、國學院大學教授・佐野光一先生がご逝去されました。私は平成9年から兼任講師として國學院大學で教鞭をとらせていただいております関係で、佐野先生には折にふれ様々なご教示を

いただきました。66歳という若さでの突然の出来事に、関係者は今でも悲しみに包まれています。

佐野先生は新出肉筆文字資料の研究者として知られるところではありますが、教育者としての一面は、とても学生思いであり、研究室には常に書道研究会の学生、卒業生が集い、書の談義に花を咲かせ、笑顔が絶えないものでした。

國學院大學には今でも佐野先生の教えが息づいています。微力ながらその伝統を受け継ぎ、書と学生を愛していきたいと考えています。

大塩平八郎の書について

浜野 真由美

香川県の静かな山間に、多度津藩の家老屋敷が「林求馬邸」として保存されています。林家が所蔵する貴重な書画や古典籍も、「林家所蔵文化財」として一括保存されていますが、近年、縁あってこの文化財に触れる機会に恵まれました。

林家が輩出した人材のうち、林求馬の子である林直記（一八〇八～一八四九、号良齋）は、陽明学者の大塩平八郎（一七九三～一八三七）と子弟関係にあったことで知られます。そのため林家には大塩の書が伝えられています。なかでも「弗慮胡獲／弗為胡成」とある縦二一五・〇×横一一一

・八（cm）の巨大な掛幅は、大塩の生き様を彷彿とさせる、実に豪快な作でした。

こうした作は研究者の目に触れず、埋もれたままになっています。江戸後期の陽明学者の書作として、目を向ける必要性を感じた次第です。

上空の俯仰

三井 忠大

飛行機は乱気流で揺れていた。内臓が上下するような揺れだった。その時次の逸話思い出した。

一九三六年、比田井天来一行は出雲から隠岐島へ船で渡った。海上荒波高く、多数の乗客が船酔いに苦しむ中、天来は一人平然と日本海を見つめていた。弟子が酔わぬ理由を訊ねると「私は天地自然に体をまかせています。自然の動きにさからうから酔うのです。」と答えた。

飛行機の動きに身をまかせることしばしば、気分は落ち着き、揺れを楽しむ余裕も出てきた。天来の俯仰法を技巧的と評する声もあるが、天来にとっては数多くある法則の一つ、別言すれば様々な見解の中において自然な書法の動きを求めた結果に過ぎなかったであろう。この逸話は天来の本質を知る上で示唆に富む。いつか自分も天来と同じ境地に至つてみたいものだ。

編集後記

◆暮れに山口県を訪ねた。初日は仙崎に金子みすず、二日目は津和野に鵠外と井澤蘭著、三日目は湯田温泉に中也と防府の山頭火の充実した旅で締め括った。

(柿木原くみ)

◆本学会諮問委員であり、書壇でも重鎮、勤務先・大東文化大学の同僚でもある河野隆先生が11月3日に逝去された。定年退職まであと数か月という69歳。9月の学内の会議では、そんなそぶりが微塵だに感じられなかっただけに、驚きも一入である。7月開催の学内学会でのご講演では、感極まられたのか、最後に涙されたのに際し、こちらが感動させられた。合掌。

(高城弘一)

◆昨年の9月23日（土）、大東文化大学において、シンポジウム「(書の芸術性)の伝統と未来を開催いたしました。本学会HPでご案内をいただいたおかげで大勢の方にご参加いただきました。ご協力ありがとうございました。

(藤森大雅)

◆中国を旅する時は画像石や画像碑をいつも気にしています。博物館だけでなく研究所や倉庫にはまだまだ面白いものがたくさん見られますが、敢えて陳列するほどのものではないと考えているのか、それとも量が多すぎるのか一般には公開されずにいます。少しもつたないかな。(小川博章)